青森六ヶ所村

核燃施設と政争の現場

寺光忠男

毎日新聞社

【著者略歴】

寺光忠男（てらみつ　ただお）昭和十四年、神戸市生まれ。三十八年、早稲田大学文学部社会学卒、毎日新聞社入社。前橋支局を経て東京本社社会部、大阪本社社会部、浦和支局次長、東京地方部副部長から六十二年、編集委員。著書に『正伝・昭和の漫画―ナンセンスの系譜』（毎日新聞社）がある。

青森・六ケ所村　核燃施設と政争の現場

印刷　一九九一年一月二〇日
発行　一九九一年二月五日

著者　寺光忠男

編集人　沢畠　毅
発行人　戸田栄輔
発行所　毎日新聞社
郵便番号一〇〇―五一　東京都千代田区一ッ橋
郵便番号五三〇　大阪市北区堂島
郵便番号八〇一　北九州市小倉北区紺屋町
郵便番号四五〇　名古屋市中村区名駅

印刷　中央製版／製本　大口製本

©MAINICHISINBUN Printed in Japan 1991

ISBN4-620-30774-2

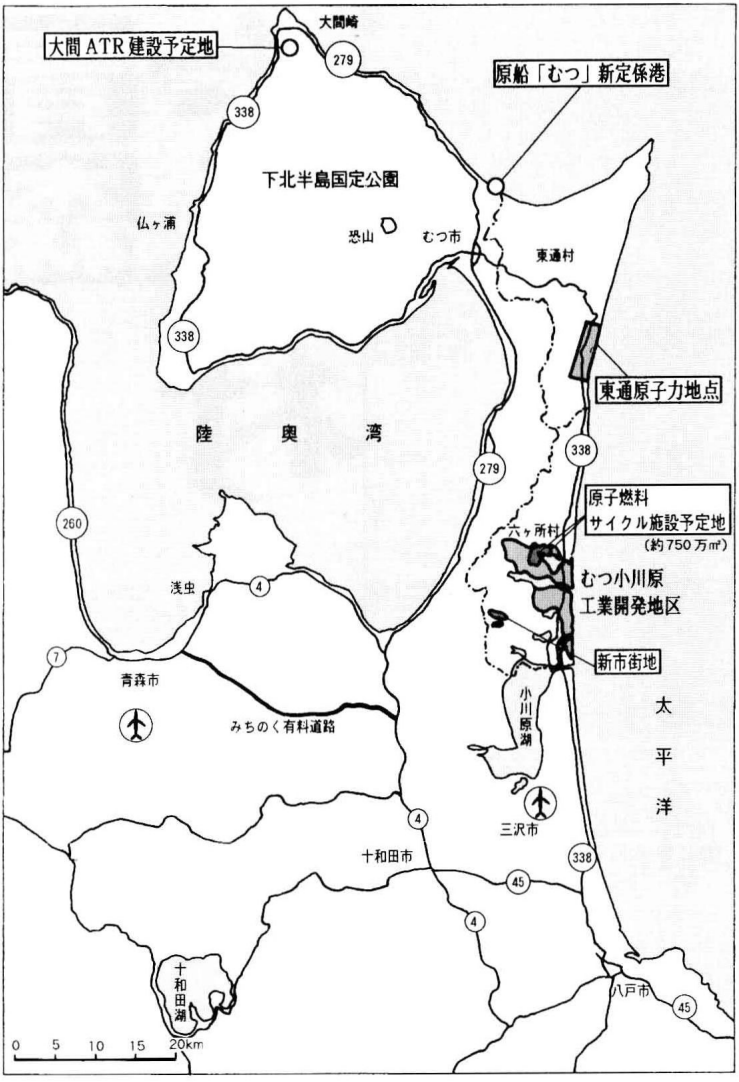
青森六ヶ所村

核燃施設と政争の現場

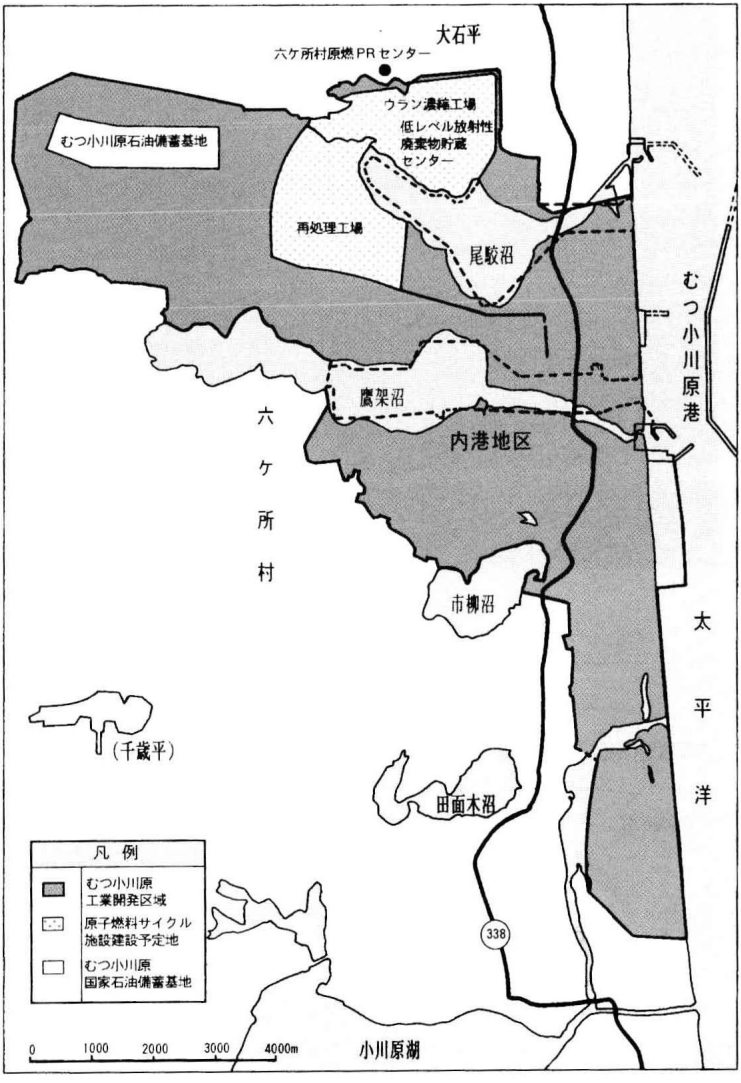
寺光　忠男

毎日新聞社

原子燃料サイクル施設位置図

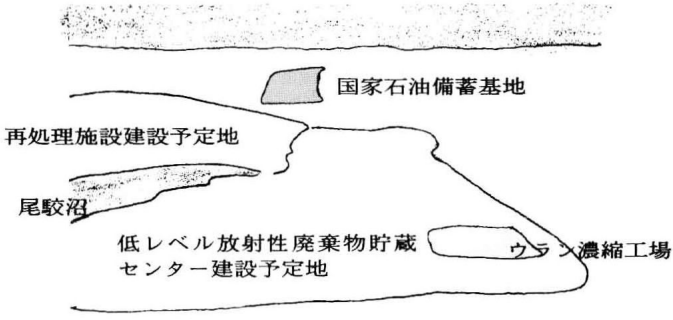


原子燃料サイクル施設建設予定地位置図



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

六ケ所村・核燃施設周辺図



六ケ所村

青森・六ケ所村

目次

第一章　「凍結」村長、誕生　9
第二章　遠心分離機、強行搬入　27
第三章　高まる安全論議　41
第四章　「りんごの花の会」と学者たち　55
第五章　「核燃」は青森になじまない　75
第六章　知事は断固、推進　93
第七章　開かれた村政へ　111

第八章　原子力は必要だ　133
第九章　平和な東海村　155
第十章　村につのる事業者への不信　179
第十一章　安全協定、締結の是非　197
第十二章　知事選の行方　219
第十三章　「第二の東海村」へ　235
資料編　257
あとがき　265

装丁・石原実
編集協力・㈱ぐるーぷ・ぱあめ（担当　渡辺工）
写真・寺光忠男　毎日新聞写真部

第一章　「凍結」村長、誕生

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「私は他所者」

本州の最北端、青森県の下北半島のつけ根に位置する上北郡六ケ所村の村長、土田浩は平成元年十二月十日が五十八歳の誕生日だった。村長に当選した日である。

「この村にとって、私は他所者。それに酪農家で、村の主産業である農業、漁業者ではない。村民に受け入れられるかどうか、村長選に立候補するとき、随分悩んだ」

六ケ所村は下北半島の太平洋側に面し、南北三十三キロ、東西十四キロの細長い村。総面積は二百五十三平方キロで大阪市の二百十二平方キロを上回る。人口は約一万一千七百人。年々減り続けているとはいえ、全人口の九・六%を占める六十五歳以上の老人の血縁、地縁による結束は固い。

土田は昭和六年、旧満州四平市の生まれ。父親は山形県酒田市出身で、開拓民として四平市に入植、南満州鉄道の二つの鉄橋をゲリラの襲撃から守るために背の低いそ菜類を栽培していた。最初はたった四戸だったがその後、入植者も増え、父親は開拓団長として中国人の信望も集めていた、という。終戦時、その父親は現地召集されて、そのまま行方不明になったが、長男だった土田は二十一年に母親、弟妹とともに両親の出身地、酒田市に引き揚げ、土田は旧制酒田中学校に入学、卒業した二十三年三月、家族とともに六ケ所村庄内にほかの開拓民と一緒に入植した。

「雑木を倒し、土を掘り起こす手作業から村の生活は始まった。辛い日々だった」

以後、営々と酪農に打ち込み、青森県酪農協同組合連合会会長、全国開拓農業協同組合連合会

村の歴史は古く　縄文時代の遺物も多く掘り出される

理事まで務めた。四十年以上も村に住みながら、土田から「他所者意識」が抜けないのは村の歴史の古さによる。いまでも村内の工事現場からしばしば縄文時代の遺跡、遺構が発掘されるように太古から人類が住んでいたことは証明されている。昭和四十六年九月には弥栄平地区から縄文時代後期のカメ棺が発掘され、この棺の中に当時二十歳前後と思われる女性の頭部遺骨が見つかり、復元されて、青森県人のルーツとして県立郷土館に展示されていることでもわかる。

古文書で見ると八〇二年（延暦二十一）に泊地区に諏訪神社が建立されており、すでに漁業を営む集落が形成されていたことを示している。十世紀ごろから「尾駮の駒」が歌集に現れ、野生の馬を飼いならしていた住民もいたようだ。一七二七年（享保十二）には尾駮ニシンに十匹一文の税金がかけられており、ニシンはこの土地の名産だっ

た。一八八九年（明治二十二）の町村制施行で一帯の倉内、平沼、鷹架（たかほこ）、尾駮、出戸、泊の六集落が統合され、六ケ所村が成立、平成元年四月に村制百周年を祝っている。この間、明治二十八年の三陸大津波で村一帯の海岸にあった漁具類が波にさらわれ、昭和二十年には米艦載機の銃撃を受け村民三人が死亡する事件もあった。

明治維新で会津藩士が下北一帯に住みついたのと同様に昭和二十一年から二十三年にかけ旧満州からの引き揚げ者らが千歳、庄内、弥栄平に入植、六ケ所村は時代の節目ごとに、土田のいう「他所者」を受け入れ、貧しいながらも自然の恵みを生かして村民たちは生き抜いてきた。しかし、六集落は泊の漁業、倉内、平沼の農業、庄内の酪農、畑作など、従事する産業が異なるせいか、地区の利益をめぐっての政争が続いてきたのも事実で村民が一致協力して村の発展を推し進める事業はなかった。土田は戦後の入植者として、庄内で農業に従事したが、作物の生育期に当たる五月から七月にかけて太平洋側から吹いてくるヤマセ（偏東風）は冷たく、作物が全滅したこともしばしばあった。ヤマセは「五月末の午後、太平洋上に薄い白雲がわき上がった、と思うと急に冷たい風が吹き寄せてくる。素肌だと鳥肌が立つ。それが何日も続くとイネは枯れてしまう」と農家の人がいうほどの冷たさ。昭和二十九年の冷害はとくに被害が大きく、九月までヤマセが吹き、十月には霜が降りて、水田、畑作とも全滅した。ジャガイモ、大豆、それに稲作を主体にしていた開拓農家たちは大きな被害を受け離農者が相次いだ。離農せずに踏んばったのは土田たち庄内の開拓者だった。国や県の補助で酪農に切り替え、乳牛飼育をはじめた。乳価が頭打ちに

なると肉牛も取り入れるなどして頑張った結果、庄内は酪農地として安定する。一戸当りの粗収入年平均が四千万円。二戸共同で肥育牛生産を続けている土田は一億七千万円の粗収入がある。

「開拓時代は木の根っこを毎日々々、掘り返し、ジャガイモや豆を植え、電灯もない掘っ立て小屋の暮らしだった。いま、思えば、よくやった、とわれながら感心する」

「むつ小川原開発」と「核燃」

土田が村政に関与するようになったのは、村が「むつ小川原開発」で開発か反対かで二つに割れていた昭和四十九年に初めて村会議員に当選してからだった。当時の村長は平成二年三月二日、急性胃かいようで死去した古川伊勢松。「村の発展は開発以外にない」と積極的な開発推進派だった古川は「むつ小川原開発」に反対の立場を取った当時の村長、寺下力三郎に四十八年十二月の村長選で挑戦、七十九票差で破り、以後四期十六年間にわたって村政を牛耳り、昭和六十年に村として立地を受け入れた「核燃料サイクル施設」の建設を推し進めてきた。土田はこの古川とともに村議会の与党、清風会の幹部として開発推進の立場で一貫して村政に関与していたが、古川が五期目にも立候補すると表明して以来、古川との間に亀裂が深まっていった。

「死んでしまった人のことを悪くいうつもりはないが、古川さんのやり方は強引すぎた」

古川は「むつ小川原開発」、「核燃施設建設」など村が受け入れた開発を推進するあまり、反

対する人たちに対しては必要以上に冷遇した。村の人たちには周知の事実になっているが、核燃施設立地反対の人たちに対しては村内で行われる建設作業や事前の遺跡発掘作業には従事させなかった。日雇い仕事による現金収入は村の主婦たちにとっては大きな魅力。それが「反対」というだけで雇用されないのだから、明らかな就労差別だった。四期目に入るとますます独裁色を強め、側近の忠告にも従わないことが多くなった。

「六十三年の八月だった。このままではどうにもならない。お前、今度の村長選に立たないか、と勧められた」

勧めたのは村会議長の橋本道三郎と村議の古泊実。土田を含めて三人は古川の側近、と自他ともに認め合った仲だった。反旗を翻すというよりは謀反だった。

「いったんは断わった。他所者だし、酪農の仕事も忙しい。村内事情に精通しているわけでもない。とうてい無理だと思ったから」

他所者に何がわかるか、は六ケ所村で生き抜いてきた人たちの共通の感情で、奈良・平安時代から漁業に従事してきた土着の子孫、「むつ小川原開発」以後に建設作業で作業員宿舎暮らしをする人たちなど各時代さまざまな人たちが住んでいるが、四十余年間、村で生き抜いた土田にしてもまだ他所者意識が抜けない。

「立候補せよ、という周辺からの圧力は日増しに強まってきた。土田が立つのではないか、というわさも流れ、私を押し上げる力も感じられ始めた」

平成元年五月、土田は立候補を決意した。

古川はこの選挙の前の四期目、昭和六十年の選挙に立候補するにあたって「五期はやらない。あとは君らに任せる」と土田などの与党幹部に約束していた。ところが、古川はこの約束を無視して早々と五期目の立候補を決め自民党の公認まで取りつけてしまった。

「だれが後継者になるにしても古川さんは辞めるべきだった。村民の政治不信はますます募った」と、土田は表現する。この「村民」という言葉を土田を含めた有力な支持者と置き換えれば、土田の立候補の決意が納得できる。古川は常々、「政治は力だ。一票差でも勝ちは勝ち」と自負していた。こんな力の政治が五期二十年間も続けば、後継を目指す土田ら有力村議の出番は失われてしまうことは自明の理だし、村民と村政のミゾも深まる一方になる。

地元新聞はいち早く土田の動きを察した。十二月の村長選に土田が立つ、との記事が出て、村内は大騒ぎになった。核燃施設建設に対し、村内には強硬な反対住民は存在するが、その数は数百人。平成元年七月に実施された参議院選挙で「核燃料サイクル施設建設阻止農業者実行委員会」が擁立、青森地方区で圧勝した参院議員、三上隆雄が六ケ所村内で獲得した票数は一九三九票。この票数を、村内に潜在する核燃施設建設反対者の最大限と見ても、建設を積極推進する古川の絶対的優位は動かない。

「どういうふうに選挙戦を進めるか、五月から八月にかけて一人でもんもんと悩んだ」

古川にとっては土田の立候補表明は裏切り行為でしかなかった。急死したために、直接本人か

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com